

M・L・キングと時代精神——聖霊論をめぐる

菊地 順

はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.) は、いわゆる神学者ではない。キングは黒人バプテスト教会の牧師であり、公民権運動の指導者であったが、神学校で教鞭を執ることも神学書を書くこともなかった。したがって、キングに神学的教説を求めることは不当であろう。しかしそのことは、キングに神学的思考や知識がなかったということではない。それどころか、キングには一般的教養と共により豊かな神学的素養と理解があり、キングは信仰と共に深い神学的・知的確信を持つて牧会に励み、また社会的活動を展開した人である。それは、その経歴からしても、また残された書物や数々の説教をはじめとする講演等からしても、一目瞭然である。そのため、キングにある程度の神学的教説を見出すことは可能であると思われる。またキングの活動と思想を理解する上で、その背景となつたキングの信仰を尋ねるとき、どうしてもその知的理解を探究せざるを得ないが、それは必然的にキングの抱いた神学的教説に向かうことになる。そして、その中心が、キリスト教の教説の根幹である三位一体論へと向かうのは自然であろう。すなわち、キングは父・子・聖霊なる三位一体の神をどう捉えていたのか、そこへとわれわれの関心は向か

うのである。

しかしながら、その観点からキングに目を向けるとき、キングには三位一体の第一位格（神）と第二位格（キリスト）についての証言は豊かにあるが、第三位格の聖霊についての証言はあまり見られない。むしろ、非常に少ないとも言える。しかし、聖霊についての意識がなかったかと言えば、そうは言えないであろう。もし聖霊についての神学的教説を求められたならば、おそらくキングは豊かに証言することができたであろう。ただ、それはキングの直接の務めではなかった。しかしまた、だからと言ってキングに聖霊についての証言が全くないわけでもない。というのも、確かに社会的不正義との闘いの中で、キングの証言の多くは神の正義とキリストの愛に集中していったが、見方を変えれば、形を変えた仕方では聖霊の存在を豊かに証言しているとも言えるからである。そして、それは、少し言葉を変えて言えば、キングの〈時代を見る目〉（時代意識）に見て取ることができよう。すなわち、それは、キングがその生涯にわたって、その時代に対する神の働きかけをどのように見ていたかということである。というのも、キングは、そうした時代に対する神の働きかけを信じていただけではなく、それを実際に実感し、しかもその働きかけがますます強まってきたという意識の下でその運動を展開していったからである。そのため、われわれはそこに、キングの聖霊についてのある程度の理解を見て取ることができるであろう。そこで、キングの時代意識を、聖霊論という視点から考察してみたいと思う。

第一節 キングと「時代精神」(Zeitgeist)

キングの時代意識を考察する上で一つ重要な概念となるのは、キングがしばしば重要な記述の中で用いている「時代

精神」という言葉であろう。その最初のものは、ローザ・パークスの逮捕についての記述の中に見られる。パークスは、一九五五年二月一日、帰宅するバスの中で運転手の指示に従わず白人男性に座席を譲らなかつたため、市条例に反するとのかで逮捕された。そして、その後、その理由についてしばしば問われ、また詮索され、挙句の果てには NAACP (National Association for the Advancement of Colored People : 全国有色人種地位向上協会) の差し金ではなかつたかと非難される事態にまで至つたが、こうした事態に対し、後日、キングはその事実経緯とその時のパークスの心情について、次のように語っている。

だが、こうした非難は、パークス夫人と全国有色人種地位向上協会の幹部の証言が明らかにしたように、全然根拠のないものだった。実際、いうならばついに堪忍袋の緒がきれ、彼女がたまりかねて一個の人間として「わたしはもうだまつてそれをうけいれることはできません」という叫びを發したのだということを理解しなければ、誰もパークス夫人のあいつた行動を理解することはできないだろう。パークス夫人が後部の座席にうつることを拒絶したのは、「わたしはこれまでに散々苦しめられてきたではないか」という彼女の恐れを知らぬ確信だった。それは、人間の権威と自由にたいする永い永い間の切望を個人的に表現するものだったのだ。彼女は、全国有色人種地位向上協会はもとより他のどんな団体からも、決してそこに「植えつけられた」のではなく、彼女自身が個人的にいだいた権威感と自尊心によつてそこに「植えつけられた」のだ。彼女は、過去の日々に蓄積された屈辱とまだ生まれてこない世代の無限の希望のために、あの座席に座つて動こうとしなかつたのだ。彼女は、歴史の力と運命の力の犠牲で、「ツァイトガイスト」——つまり時代精神によつていわばあの座席にすえつけられたのだ⁽¹⁾。

このキングの理解は、パークス自身の証言とも合致している。すなわち、パークスは、この時の状況について次のように語っている。すなわち、「よく人は、あの日私が席を譲らなかつたのは、疲れていたからだと言います。しかし、それは違います。私は肉体的には疲れていなかったのです。もし疲れていたとしても、いつも仕事後に感じる程度の疲れだったにすぎません。……違うのです。私が疲れていたのは、白人のいいなりになることに対してだったのです」。

またこうも証言している。「人から、全国有色人種地位向上協会が探していたテストケース（試訴）の起訴人に自分もなれるかもしれない、とあの時考えたかどうか質問されることがありますが、そういうことはまったく考えませんでした。もしも自分に起こるかもしれないことを実際に熟慮していたら、私はあのバスを降りていたことと思います。しかし、私は座っているほうを選んだのです」⁽³⁾。このパークスの証言にも見られるように、パークスが座席を譲ることを拒否した背景には、「白人のいいなりになることに対して」の積年の疲れがあつたのであり、それはパークスのみならず、黒人社会全体が経験していたことなのである。しかも、そうした疲れを覚える中で、それに対する抗議の思いも大きく芽ばえようとしていた。そうした時代の流れの中で、新しい時代の先駆けともなつたのが、パークスの拒否（抗議）であつたのである。また、それゆえにキングは、それを「時代精神」とも呼んだのである。

キングはまた、一九六三年にバーミングハムの獄中で書いた文書の中でもこの「時代精神」について触れ、以下のように述べている。

抑圧されているひとりびとりが、永遠に抑圧にあまんじるはずはありません。自由をこがれる気持ち、ついに、こみあげてきます。これが、現に、アメリカの黒人に起こっているのです。内なるなにかが、黒人に自由という生得権を思い起こさせ、外なるなにかが、それを獲得できるのだと気付かせているのです。意識する、しないにかかわらず、アメリカの黒人は「時代精神」にとりつかれて、アフリカの黒い兄弟た

ち、アジア、南米、カリブ海の褐色や黄色の兄弟たちとともに、人種正義という約束の地にむかつて、おくられては一大事とばかりに突進しているのです。⁽⁴⁾

キングは、ここでも、「内なるなにかが、黒人に自由という生得権を思い起こさせ、外なるなにかが、それを獲得できるのだと気付かせているのです」と語り、自由を求める内的高揚とそれを実現しようとする時代的うねりを肌で感じながら、時代の変化を実感する中で、そうした機運を「時代精神」と呼んでいる。そしてまた、キングは、そうした「時代精神」を感じ、その精神に呼応する仕方、その社会的闘争を展開したのである。そういう意味では、この「時代精神」は、聖書の言葉を借りれば、キングを導いた〈霊的力〉であつたとも言えるであろう。確かに、「時代精神」という場合、その一般的意味は、一九七四年版のウェブスター辞書によれば、「ある時代の一般的な知的、道徳的、文化的傾向」という意味であるため、そこには時代（世俗）の力という意味合いもあり、キリスト教の立場から見れば、しばしばキリスト教の教えに反する時代的風潮と見なされることもあるであろう。しかし、キングがこの言葉を用いるとき、それはキングの立場（キリスト教）にも呼応するものとして理解されていることは明らかである。そして、それを、聖書の語る霊的力に相当する位置を持つものとして見ることは、あながち間違いではないであろう。こう主張するのは、逆に言えば、キングはほとんど聖霊については語っていないからである。キングには神とキリストについての明確な主張はあるが、聖霊についての言及は極めて少ない。しかし、そのことは、それを無視し、あるいは否定しているということではないであろう。むしろ、それは、一つには、この「時代精神」という言葉によつて代用されているとも言えるように思う。ZeitgeistのGeistは「霊」という意味でもある。したがって、キングにおいては、それを時代を支配する神的霊として理解することは、ある程度ゆるされるのではないかと思う。

第二節 キングの時代意識

以上のように、キングが「時代精神」という言葉を用いた背景には、キング自身の時代意識があつたのである。そこで、その時代意識について、もう少し詳しくキング自身の言葉を辿りながら明らかにしたいと思う。キングは公民権運動に先立つ半世紀の黒人の歴史を振り返り、次のように述べている。

この半世紀間に、アメリカのニグロの生活には根本的な変化が見られた。二つの世界大戦という社会的大変動や大恐慌や自動車の普及にともなつて、ニグロは、漸くこれまでいとなんできた農村のプランテーションでの孤立した生活からはなれることができたのだし、またこのことは彼らにとって必然的な結果でもあつたのだ。農業が衰退し、これにともなつて工業が発達したために、多数のニグロは都市の中心地にひきつけられ、彼らの経済状態はしだいに改善されていった。こうして都市生活に新たに接触したために、彼らの視野はひろげられ、教育程度をたかめる新しい可能性がつけられた。こうした一切の条件がかさなりあつて、ニグロは自分自身の姿を新たな目をもつてながめるようになった。生活の経験がひろがつたために、彼らの胸のなかには、自分たちは、より大きな社会的複合体のなかの平等な一員なのだから当然自分たちにあたえられた新しい責任にふさわしい権利と特権をあたえられるべきだという意識が作りだされた。かつて、奴隷制と人種の隔離の悪影響の結果つくられた悲しむべき劣等感にくるしめられていたニグロは、いま自身自身をあらためて再評価することをせまられたのだ。こうして彼らは、自分自身がなにかであることを感

はじめた。彼らの胸にいだく宗教は、神はすべての子供を愛したもうということと、人間にとつて一番大事なことは「彼のもつ特殊なものではなく彼のなかの基本的なもの」であり、——彼の髪の毛や皮膚の色ではなく、神にたいする永延の価値だということを彼らにあかししたのだ。

こうしてたかまつた自尊心は、ニグロたちの胸に、第一級市民としての地位を獲得するまで、いかなる犠牲をはらおうとも戦いぬこうという新しい決意をふきこんだのだが、これこそが、モンゴメリーの物語のもつ真実の意味なのだ。南部に自己の権威と運命を新たに自覚した新しいニグロがいることを理解しなければ、モンゴメリーのバスに関する抗議運動を十分に理解することはできないだろう。⁽⁷⁾

キングはまた、白人たちについても、次のように語っている。

ニグロが自分自身についていだいた影響が変化してくるにともなつて、数百万に上る白人の側にも人種的隔離についての道徳的な意識がめざめはじめた。独立宣言に署名していらい、アメリカは人種問題については、早発性痴呆症患者のような姿を示してきた。アメリカは、二つの身体にまつぶたつにひきさかれ、——ひとつの身体では誇らしげに民主主義者であることを宣言したが、いまひとつの身体では民主主義にまつころから反対のことをやってきたのだ。奴隸制と同様に人種的隔離の現実は、たえず、民主主義とキリスト教のかかげる理想に正面から衝突せねばならなかった。実際、人種的隔離と差別とは、一切の人間は生まれながらにして平等だという原理にもとづく国民のなかでは、まったく奇妙なパラドクスなのだ。こうした矛盾は、南部であると北部であるとを問わず、一切の白人の良心を悩ませ、彼らの多くに人種的隔離は根本的に悪しきものだということをさとらせた。⁽⁸⁾

以上のように、キングは、二つの世界大戦を経る中で時代そのものが大きく変化し、その中にあつて黒人の意識も次第に目覚め、それが自由を求める大きな機運になつていき、五〇年代半ばのモンゴメリーでのバス・бойコット運動に繋がつていったと見ている。そして、そこにはまた、白人の意識の変化をも見られるとされている。このように、キングは、時代の変化を大いに意識しながら、その運動に関わることになつたのである。逆に言えば、そうした時代の機運を感じながら、その「時代精神」に後押しされて、新しい時代へと期待と希望をもつて邁進することになつたのである。そして、それは、その社会的運動を通して、絶えず感じ取られていった時代意識でもあつた。そこで、そのことを、以下においていくつかの証言を通して明らかにしたいと思う。しかし、その前に、そうした時代意識をより客観的に示す出来事があつたことを見ておきたい。それは、黒人の歴史についての一冊の書物の出現であつた。

第三節 C・V・ウッドワード『ジム・クロウの奇妙な経歴』——「歴史のバイブル」

C・V・ウッドワードは、一九五五年に『ジム・クロウの奇妙な経歴⁽⁹⁾』を出版した。これは、アメリカの黒人史を扱つたもので、特にアメリカ南部における南北戦争後の再建期から人種隔離制度の時代を中心に、一九五四年五月のブラウン判決までの歴史を明らかにしたものである（なお一九六五年の第二版では一九六五年八月までを扱つた第五章を加え、さらに一九七三年の第三版では一九六五年八月以降を扱つた第六章を加えている）。今でこそ、そうした歴史書は多数出現しており、そのより詳細な内容が明らかにされているが、当時（一九五五年）においては、この種の書物の出版は画期的なことであつた。というのも、長い間、黒人蔑視の中で、黒人の歴史を学問的に扱うこと自体が少なく、

またそうした一般書の出版ということはなおさら皆無であつたからである。そのため、黒人も白人も、一般に人種隔離制度は昔から存在する当然の制度のように思つていたのである。その当時の意識について、ウッドワード自身、初版の「序」において、以下のように語っている。

「ジム・クロウ」制とよばれる人種分離の法体系ができたころの歴史は、今「一九五五年」なおかなり不明瞭である。それは少数の高齢者以外の者にとっては記憶にない時代であるが、一方、極く少数の専門家以外の人びとから真剣な検討をうけるにはあまりに新しすぎるのである。従つて少数の専門家の研究成果は一般の有識者が読む書物になつていない。まして一般大衆には知られていないことがらである。

南部人を含むすべてのアメリカ人の中で、中年およびそれ以上の年齢層はジム・クロウと同年代であり、この制度のもとで成人した。人種分離が一般的規則でも慣行でもなかつた時代を憶えてはいない人たちがジム・クロウは「いつでもおこなわれていたことだ」と思つたとしても当然である。「いつでも」でないとするれば、そうなつたのは「奴隸制時代から」とか、「南北戦争以来」、もしくは「再建時代以来」であるとする。ある人たちはこの制度は奴隸制と併存した制度であるとさえ思つている。ジム・クロウの諸法が比較的新しいものであること、あるいはジム・クロウがどのように、いつ、かつなぜできたかを明確に知つているものはほとんどいない。⁽¹⁰⁾

ウッドワードが指摘するように、当時の一般の人たちは、黒人も白人も、ジム・クロウ制を昔から行われてきた当然の制度と見なしていたのである。しかも、ウッドワードによれば、意識的に人種問題に関わり、また取り組んできた人たちにおいても、似たような状況があつたのである。すなわち、「アメリカ国民を構成する急進主義者、自由主義者、

保守派、および反動派というような、各種の考えをもった人たちも、黒人、白人の両人種も、彼らの考えをしばしば不確実な歴史的根拠、または全く誤った情報によって自らの意見を形成しているというのが実情であるように思われる⁽¹¹⁾。その結果、「両人種間に災禍が起こるという最も悲しい予言も、また反対に幸福がくるという最も樂觀的な予測もこのような不正確な歴史の理解に基づいているのである。最近のいくつかの改革のプログラムについてもまた改革反対の戦略についても同じことがいえるのである⁽¹²⁾」。したがって、再建期以降の黒人の歴史を扱ったウッドワードの著書の出版は、当時においては非常に画期的なことであつたのである。確かにその研究は、この分野の嚆矢とも言われるべきもので、その限りでは、ウッドワード自身、「私の扱っているものが、研究不足の過去の時代と、その起り方が急でありすぎ、新しすぎて適確な把握ができていない現在のでき事とであるために、誤りをおかすことはきけられないであろうと思われる」と断りながらも、「また一方、時代の要請が歴史家に、複雑で緊急の問題の解明にのり出すことを求めていることを思えば、私のやや未熟な著述も意味があると感ずるのである⁽¹³⁾」と語る所以である。

ところで、ここでウッドワードが、自分の研究を「時代の要請」と捉えていることは、大変興味深いと言わなければならない。それは、キングが語つた「時代精神」にも通じる時代感覚を表現しているからである。そしてまた、同時に、キング自身が、この書物の出現にそうした時代精神を見て取つたとも言える発言をしている。というのも、キングは、本書を「公民権運動のための歴史のバイブル⁽¹⁴⁾」とも呼んでいるからである。おそらく、キング自身、この書物を通して、黒人の歴史をより客観的に、より正確に学ぶことにより、黒人たちが置かれている状況をより明確に理解し、一九五五年一月から始まつたモンゴメリーにおけるバス・бойコット闘争においても、またその後展開された公民権運動においても、一つの堅固な足場を与えられたであろうことは、十分推察することができるのである。またそれゆえにこそ、本書を「公民権運動のための歴史のバイブル」とも呼んだのである。したがって、その意味でも、ウッドワードのこの書物はキングにとつても画期的なものであり、またその当時の時代精神を具現する一つとなつたことは、

間違いないところであろう。

第四節 公民権運動に見る時代精神

(一) ブラウン判決——新しい時代の予兆

こうした時代精神を明確に意識させることになったのが、公立学校の人種隔離制度を違憲と判断した、「オリバー・ブラウン対カンザス州トピーカ市教育委員会」の訴訟事件についての最高裁判所の判決であったと言える。前節で触れた『ジム・クロウの奇妙な経歴』の著者ウッドワードは、この書物の中で、一般に「ブラウン判決」と呼ばれるこの訴訟事件について以下のように紹介している。

一九五四年五月一七日、新しい最高裁判所長官オール・ウオレンは黒人原告の主張を支持する最高裁判所の判事全員一致の意見を表明した。憲法修正第一四条の立案者たちが学校教育における人種分離についてどのような考えをもっていたかという歴史的議論を「不確定」であるとして退け、最高裁判所は、歴史の検討は問題解決の十分な指針にはならないという立場をとった。「われわれはその修正条項が採択された一八六八年に時計を戻すことはできない」と最高裁判所は主張した。「またブレッシー対ファーガソン事件の判決が書かれた一八九六年に時計を戻すこともできない。われわれは公立学校教育を今日の発展した姿において、今日のアメリカ人の生活におけるその地位に照らして考慮しなければならない」。こうした状況に

においては「白人と黒人の子供を公立学校で分離して教育することは黒人の子供に有害な影響を与える。なぜならば、それは黒人の子供に社会における彼らの地位について劣等者の意識を抱かせ、そしてその劣等者意識は彼らの情操と頭脳におそらく癒すことができないであろう悪影響を与えかねないからである」。ここで最高裁判所の意見は脚注を付け、こうした見解を支持する社会学者の論著に注目した。「公立学校教育の分野では『分離すれども平等』という原則は存立しえない。われわれは人種分離の教育施設は本来的に不平等であると結論する」と最高裁判所は言明した。原告はそれゆえ「憲法修正第一四条によって保証されている法の平等な保護を奪われて」いたのであり、したがって、公立学校における人種分離は憲法違反であった。最高裁判所はこの判決の趣旨を実行に移す問題について、さらに議論することを命じ、こうして問題を事実上一年延期したのである⁽¹⁵⁾。

ウッドワードは、歴史学者らしく、「ブラン判決」の内容とその本質について、非常に的確に論じている。そして、こう付言している。「五月一七日の最高裁判所の判決は、公民権に関する今世紀の最も重要で影響甚大な判決であった⁽¹⁶⁾」。キングもまた、「ブラウン判決」から三年後、それを記念して行った講演でこう語っている。「三年前わが国の最高裁判所は、端的で雄弁かつ明瞭な言葉で、来るべき諸世代の脳裏に長く刻まれることになる判決を下した。すべての善意の人々にとって、この一九五四年五月一七日の判決は、人間の捕囚の長い闇夜を終わらせる喜ばしき夜明けの福音であった。それはあえて自由だけを夢見てきた全世界の何百万という収奪された民にとって、まさに偉大な燈台の光であった⁽¹⁷⁾」。そしてまた、後日、以下のようにも語っている。

一九五四年の五月一七日は、一切の善意をもつ人たちにとっては、強制された人種的隔離の永い闇夜に喜

ばしい終焉を劃する日だった。単純明快な言葉で、最高裁判所は、「分離すれども平等な」施設は本来平等なもので、子供たちを人種にもとづいて隔離することは彼らにたいして法の平等な保護を拒絶するものと判断した。この判決は、これまではたんに自由を夢みることにしようとしなかった、相続権をうばわれていた数百万のニグロたちに希望をもたらした。そればかりではない。最高裁判所の判決は、ニグロたちに自分たちの権威を一だんとつよく自覚させ、正義を獲得しようとする決意を一だんとつよめたのだ。⁽¹⁸⁾

このように、ブラウン判決は、アメリカの黒人社会にとっては、それまでの長い人種隔離制度の足かせから黒人を解放する希望の光となったのである（白人社会にとつては、それは真逆の忌むべきものとなったことも周知の通りであるが）。そしてそこに、キングも含め多くの者が、黒人のみならず（一部の進歩的）白人も、新しい時代の到来を予期することになったのである。キングは、一九五四年の春、ボストン大学大学院を修了するにあたり、その後の進路のことで大いに悩むが、最終的には南部に戻り、牧師として南部に仕えることを決めた。そして、その決断の中で四月一四日に、デクスター・アヴェニュー・バプテスト教会の招聘を受諾したのであるが、その決断に至った理由の一つに、新しい時代の到来の予感があつたのである。このことについて、キングは、「ぼくたちは、南部にはいま何やら注目すべき事態が發展しつつあると感じており、これを自分の目で見ようとのぞんだのだ」⁽¹⁹⁾と述懐している。ブラウン判決が出たのは、この少し後の五月一七日であつたから、時間的に見ればこの予感にはこの判決のことは含まれていなかったとも言える。しかし、多くの意識ある人たちにとつては、この判決はある程度予期されたものでもあつた。たとえば、当時ジョージア州クレイトンを拠点に人種隔離問題と取り組んでいた白人の作家であり、また思想家、活動家でもあつたりアン・E・スミスは、この判決について次のように語っている。「どういう判決が下るのか、もうわかつていた。時代の要請が明確に決めていたからだ。世界情勢だけでなく、アメリカ国内において、子供たちの生活や、大人の感情や

意識など、人々の有り様が変化したことによって、自由で民主的な国には、今はもう法制化された人種隔離制度が居座る余地はない、と国の最高権威によつてはつきりと宣告されること以外に考えられなかった。私たちはすでに納得していた。しかしそのことが高らかに告げられるのを聞いて確かめたかったのだ。そしてついに簡潔でわかりやすい言葉で伝えられたとき、たちどころに強い誇りがアメリカ全土に広がった⁽²⁰⁾。スミスは、「ブラウン判決」を「時代の要請」として、かなりの確信をもつて予期していたのである。もちろん、そうでない者たちも多くおり、それは判決後のさまざまな反動を見れば明らかである。しかし、意識ある者たちにとつては、すでに時代は変わっていたのである。そして、もはや「人種隔離制度が居座る余地は」なかったのである。そして、キングも、そうした人たちの一人として、予期と期待を持つてこの時代を見ていたのである。そして、その予感が、先ほどの「南部にはいま何やら注目すべき事態が展開しつつある」との言葉となつて現れたと言える。そしてまたそこに、のちに「時代精神」として語る新しい時代の到来の予兆を見たのである。

(二) モンゴメリーでの勝利

一九五〇年代後半から六〇年代前半の公民権運動のきっかけとなつたのは、アラバマ州の州都モンゴメリーで一九五五年一二月から一年余りにわたつて闘われたバス・ボイコット運動での黒人社会の勝利であつたことは間違いないことであろう。キングは、この新しい時代を切り開くことになつたモンゴメリーでの勝利について、次のように述べている。

だから、どんなに合理的な説明をもちだしても、いくつかの点で駄目になつてしまう。モンゴメリーの抗

議運動のまわりには理性をこえた何ものかがあるのだ。それは神のなしたもう御業を考慮にいれなくては決して十分に証明することはできない。……だが、何と名づけようとも、そこに何か超人間的な力が働いて、宇宙の不調和から調和をつくりだしたのだ。そこには悪の山をつきくずし、不正の丘をならす働きをする創造的な力がある。神はいまもお働きをやめず、歴史をつらぬいて奇蹟を成就したもうのだ。あたかも神が、アメリカにおける自由と正義のための闘いとその勝利とを証しする場所としてモンゴメリーを用いることに定めたもうたもののように思われる。そして、そうした証しの場所としては、古い時代の南部の最大のシンボルとしてのこの地よりもいい場所がどこにあるのか？ アメリカ諸州連合の揺籃の地モンゴメリーが、自由と正義の揺籃の地に転化させられようとしているのは、現代のすばらしいアイロニーのひとつなのだ。⁽²¹⁾

キングは、しばしば「一体なぜこの事件『バス・ボイコット運動』はアラバマ州のモンゴメリーで、しかも一九五五年におこったのか」との質問を受ける中で、自ら自問自答しつつ、それに応えようと試みたが、明確な歴史的、社会的要因を確定することはできなかった。確かに、キングによれば、一九五五年に起こったことについては、一九五四年の「ブラウン判決」の影響があつたであろうと推定している。⁽²²⁾しかし、なぜモンゴメリーで起こったのか、そのことについては、さらに謎である。キングは、その一因として、「たしかに、モンゴメリーのなかで永年にわたって行われていたニグロにたいする不平等な待遇のなかに、この問いにたいする説明の一部をみつけることはできるであろう」としながらも、しかしそれで一切の説明がつくものでもなかった。というのも、そうした劣悪な状況はモンゴメリーに限ったことではなかったし、モンゴメリー以上に劣悪なところもあったからである。またその理由を指導者たちの「団結」に認めることもできなかった。というのも、抗議運動前のモンゴメリーの黒人社会は「指導者の間の分裂と、無関心と、

自己満足によって特徴づけられる」ものであったからである。さらにまた、「新しい指導者たち」の出現によっても説明することはできなかった。なぜならば、「モンゴメリーの物語は、たとえ抗議運動の指導者が生まれなかったとしても、必ずひきおこされたことであろう」⁽²⁴⁾からなのである。その結果、キングが最後にたどりついたのが、上に引用した結論であつたのである。それは、ひと言で言えば、〈神の働き〉である。

キングは、この抗議運動の中に、人間を超える神の力を感じざるを得なかったのである。すなわち、繰り返しになるが、「何か超人的な力が働いて、宇宙の不調和から調和をつくりだしたのだ。そこには悪の山をつきくずし、不正の丘をならす働きをする創造的な力がある。神はいまもなお働きをやめず、歴史をつらぬいて奇蹟を成就したもうのだ」と確信せざるを得なかったのである。そしてまた、その場所についても、「あたかも神が、アメリカにおける自由と正義のための闘いとその勝利とを証しする場所としてモンゴメリーを用いることに定めたもうた」と思わざるを得なかったのである。周知のように、モンゴメリーは、南北戦争（一八六一―一八六五年）のとき、アメリカ諸州連合（The Confederate States of America）が発足した揺籃の地であり（その四か月後、首都はバージニア州リッチモンドに定められたが）、南部にとつては、歴史的にも精神的にも重要な街であるが、新しい時代をもたらすために、神はアイロニーな仕方でその地を選んだのだと、キングは高揚して語るのである。すなわちキングは、モンゴメリーで起こったバス・бойコット運動の背後に神の揺るぎない働きを見、それこそが、その闘いに勝利をもたらしたものであったと断言するのである。そして、こうした神の働きは、その後の公民権運動においてもしばしば経験されていったのである。すなわち、われわれはこうしたキングの具体的な霊的経験に、キングの聖霊論を豊かに見て取ることができると言えるであらう。

(三) バーミングハムでの闘い

おそらく、キングたちの抗議運動の最大の闘いはバーミングハムでの闘いであつたと言えるが、この闘いにおいても、キングはその勝利を勝ち取る中で、神の揺るぎない働きを強く経験している。それについては、すでに第二節でも触れたが、この時もキングは、「私たちはくりかえしある種の霊的な体験をすることがある」と語り、その経験をすると、「何かがこの宇宙のどこか見えないところに隠れていて、いつか必ず正義を実現させ、勝利に導くのだということがわかる。この信念がありさえすれば、どんな困難なときでも前に進みつづけることができる」と語っている⁽²⁵⁾。

ところで、こうした歴史における神の働きに注目するとき見落としてならないことは、神の働きが希望ある未来へと導くという時代意識と共に、それはまた、時代を裁く力ともなるということである。そして、それは、神と共に歩む教会において、最も顕著に現われるとも言える。この点についてキングは、バーミングハムの獄中で書いた手紙の中で、当時の教会について触れ、こう語っている。「これまでに例をみなかったほどの神の審判が、教会のうえにくだされようとしています。もし、今日の教会が、教会初期のあの犠牲精神にたちもどらなければ、まことの響きを失い、何百万のひとびとの信を喪失し、二〇世紀にとつてなんの意味もない見当違いの社交クラブと片付けられることになるでしょう⁽²⁶⁾」。キングは、初期の教会は、「ただ単に世論の趣向や原則を記録する温度計」ではなく、「社会のいつそう多くのひとびとを変革する加熱調整器^{サーモスタット}」であつたと語り、また初期キリスト教徒は「その努力と犠牲によって嬰兒殺しや猛獣との剣闘といったむかしの悪習を終わらせました」と指摘し、上記のような批判を行っている⁽²⁷⁾。すなわち、キングは、「内なる霊的教会、すなわち、教会のなかの教会⁽²⁸⁾」の実現を目指すべき現実の教会が、単なる社交クラブに墮し、社会を変革する力を失うならば、それは「これまでに例を見なかったほどの神の審判」を受けるだろうと語るのである。そ

して、そうした審判も、キングが歴史における神の働きとして経験したことなのである。

さらに、もう一点、キングが歴史における神の働きを論じるとき注目しなければならないことは、キングはその働きをアメリカが掲げる自由の理念と連動させて理解している点である。すなわち、キングは上述した教会に対する批判を踏まえながら、また次のようにも語っている。「教会が全体として、この決定的な、⁽²⁹⁾ 時の挑戦に応じるように望みます。しかし、たとえ教会が正義の擁護に立ちあがらないとしても、将来について、わたしは絶望してはいません。たとえば、われわれの動機が、現在のところ誤解されていても、バーミングハムの結果については、なんら危惧を感じていません。われわれは、バーミングハムでも国じゅうのいたるところでも、自由の目標に到達するでありましょう。というのは、アメリカの指標は自由ということだからです。いかにののしられ、軽蔑されようとも、われわれの運命は、アメリカの運命と結ばれています」。「われわれは自由を勝ちとるでありましょう。なぜなら、われわれのこ⁽³⁰⁾ だ、⁽³⁰⁾ する要求のなかには、わが国の神聖な遺産と神の永遠のご意志が体现されているからです」。

ここでキングは、たとえ教会が立ち上がらないとしても、また自分たちの動機が誤解されても（その結果、積極的な協力を得られないとしても）、何ら危惧を覚えないと語る。それは、そうした、いわば人間的な努力にも増して歴史を導くのは、「わが国の神聖な遺産と神の永遠のご意志」であるからなのである。キングは、「わが国の神聖な遺産」である自由と平等を謳った独立宣言に、「神の永遠のご意志」が具現化されており、それは人間の意志を超えて実現されていくものだと言っているのである。そして、そこに、歴史における神の働きを見ている。したがって、キングにとっては、神の働きは、アメリカの理念と共にあるのであり、その理念の実現が、正にキングが生きた時代に、ついに実現するとの思いで神の働きを見ていたのであり、またその力に押し出されて、その闘いを闘ったのである。

(四) ワシントン大行進——神の国の到来

キングたちが携わった公民権運動のクライマックスは、何よりも一九六三年八月二八日に行われたワシントン大行進（正式名称は March on Washington for Jobs and Freedom：職業と自由のためのワシントン行進）であったことは言うまでもないであろう。キングは、この歴史的出来事について、以下のように感動的に振り返っている。

ワシントンは、見るべきものの多い都市である。大統領就任式が、四年目ごとに偉大な人物や実力者をその地に集わせる。あらゆる民族衣裳や風貌の国王、首相、勇士、名士たちが、ここ二五〇年以上にわたり、この首都でもてなしを受けてきた。けれども、ワシントン市のその輝かしい歴史をつうじて、一九六三年八月二八日の集会ほど大規模で壮麗な景観が見られたことはなかった。その日、首都を目指してやってきた二五万ちかくのひとびとのなかには多くのお偉がたや名士が見られたが、人の心を打ったすばらしい感動は、生きているうちに民主主義を達成しようとの決意を同じくする証人として、威風堂々と林立した一般大衆がもたらしたものであった。

心はひとつに結ばれて、彼らはほとんどすべての州からやってきた。あらゆる交通機関を利用してやってきた。参加者の多くのひとびとにとって、それはかなりの金銭的犠牲でもあったが、一日から三日の給金をフイにしたうえ、交通費を自弁してやってきたのである。彼らは固苦しくなく上機嫌であったが、それでいて規律があり思慮ある行動をとった。彼らは、指導者を讃えることにやぶさかではなかったが、指導者の側でも、心のなかでは大群衆に拍手を送ったものであった。その日、演説をした多くの黒人は、群衆が示した

献身的な力を感じとり、自己の民族にたいする尊敬の念を深めたのである。途方もない数の大群衆それ自体が、このうえなく崇高な運動の躍動する心臓部であつた。それは銃をもたない軍隊であつたが、そうかといつて、決して力なき集団ではなかつた。そこには、あらゆる信条の信奉者が、また、あらゆる階級に、あらゆる職業に、あらゆる政党に所属するひとびとが、ただひとつの理想に結ばれて集まつていたのであつた。それは、たたかう軍勢であつたが、愛がそのもつとも強力な武器であることを見まがうものはいかなつたであらう。⁽³¹⁾

キングは、ワシントン大行進の本質を、何よりもアメリカの民主主義の理念達成のために、黒人を中心に、白人も、信条を異にする者たちも、一致団結したことに見ている。そして、その民主主義の理念とは、何よりも自由を意味した。このとき、人々は、独立宣言に謳われているアメリカの自由の理念の達成のために一致団結し、あたかもそのために闘う軍勢のように力に満ち溢れたのである。最初の黒人史を書いた歴史家のウッドワードも、その著書の中で、このワシントン大行進について以下のように記している。

これはリンカーン記念堂の前に二〇万人以上の人びとが集まつて行われた。その大多数は黒人であつたが、多くの白人も参加していた。これは首都で行われた、差別是正を求める最大の示威運動であつた。その群衆は平和的に温和に振舞い、新聞によると「群衆の品位という点ではいわば全国的な模範」であつたが、マハリア・ジャクソンの歌やキング博士の「私には夢がある」という叙情的な演説に対する彼らの反応を見れば、そこに集まつた群衆の心に、またそれをテレビで見ていた何百万の人びとの心に深い感動がわき上つていたことを感じとらずにはいられなかつた。アメリカ人は今や連邦政府が活動を開始することを期待

し、ケネディ政権は国民のその気分を鋭く感じとつたのであった。⁽³²⁾

このワシントン大行進のクライマックスは、やはり何と言つても、キングのスピーチ「私には夢がある」にあったこととは言うまでもないことであろう。キングは、あのスピーチで、最後、用意した原稿を脇に置いて、この夢を語り出したのである。それは、マハリア・ジャクソンが「マーティン、あの夢の話をして」と叫んだからだとも言われている。おそらく、ジャクソンは、キングが、二か月前（一九六三年六月二三日）、デトロイトで行った行進のあと、市中心街のコーボー・ホールで行われた決起集会で語ったスピーチを思い出したのであろう（それを直接聞いたかどうかは不明であるが）。キングは、そのスピーチの終わりで、ワシントン大行進で語ることになった夢の話をしたのである。そのとき、キングはこう語り出した。「それゆえ私は絶望感を抱いたまま南部に帰って行こうとは思わない。出口のない真暗な地下牢に捕らわれているといった感情を抱いたまま南部に帰って行こうとは思わない。必ず新しい日はやって来るのだと信じて帰って行きたいと思う。だから今日の午後、私には夢がある。それはアメリカの夢に根ざした夢である」。キングは、こう語り出し、そしてさらに、「私は、いつの日かジョージアとミシシッピとアラバマで、昔の奴隷の子孫と奴隷主の子孫とが兄弟同士として、共に生きることができるようという夢を持っている」と語り、夢の話を展開した。⁽³⁴⁾そして、この夢の話を、キングはワシントン大行進のスピーチでも、その最後に語ったのである。そして、聞く人々に、永遠にこだまする感動を与えることになった。このとき、テレビの中継を見ていたケネディ大統領も、キングのスピーチを聞いて舌を巻いたと言われている（特に準備した原稿を離れたアドリブに感動した⁽³⁵⁾）。この行進のあと、キングたちはホワイトハウスに招かれ、一時間余りケネディと会見したが、そのときキングに会ったケネディは、笑顔で「I have a dream」と語つてその感動の気持ちを伝えている。⁽³⁶⁾おそらく、それは、キングのスピーチを聞いた大多数の者たちが感じた思いであつたと言えるであろう。

キングが夢について語ったのは、偶然の事であつたかもしれない。少なくとも、それは予定にはなかつたことである。しかし、その偶然とも思えることが、ワシントン大行進を永遠に歴史に刻みつける決定的な出来事にしたとも言える。そしてまた、キングの名を、永遠に歴史に刻むことにもなつたのである。⁽³⁷⁾ そのため、そこに、ある超越的な力の働きを見る人が出てくるとしても、それは不思議なことではないであらう。妻のコレッタは、「私には夢がある」のフレーズが語り出された時のことを思い起こして、次のように語っている。「あの日、そこにいた私たちすべては、彼の言葉がある高みから、マーティンを通して、彼の前にいる疲れた人々に流れ出たように思われた。そう……天そのものが開け、私たちすべては変えられたように思われた」。⁽³⁸⁾ そしてまた、キングのスピーチが終わつた時についても、こう語っている。「マーティンが話し終えたとき、演説者が受け得る最大の賛辞である畏怖の沈黙があつた。それから、二五万の人たちが彼の言葉にエクスタティックに応えて叫んだとき、すさまじいどよめきが起こつた。彼らが抱いた一つとなり、一体となつたという感情は、完璧であつた。彼らは、一つのすさまじい声で叫び続けた。そして、その瞬間、神の国が地上に到来したかのようであつた」。⁽³⁹⁾ おそらく、この感情は、一人コレッタが感じたことではなく、あの場にいた多くの者たちが経験したことであつたのではなからうか。そして、夢を語つたキング自身、最も強くそのことを感じたように思われる。そしてまた、そのとき、同時に歴史に働く神の力をも強く感じ取つたのではなからうか。

おわりに

最後に触れておかなければならないことは、キングが語つた「時代精神」が、キング自身においても具現化し、キングもそのことを強く自覚していたということである。そのことは、おそらくは、上述のワシントン大行進においても、

その他のさまざまな闘いにおいても、絶えず感じ取られていたことであろうと推察できるが、以下の祈りの言葉には、そのことがより率直に語られていると言える。

ああ神よ、どうか自分を正しく見つめさせてください。神よ、どうか私はただ運動のシンボルに過ぎないことを、自覚させてください。どうか私に、自分はドイツ人のいわゆる「時代精神」(Zeitgeist)の犠牲者なのだということを、したがって歴史に何かが起ころうとしていることを、理解させてください。そしてたとえ私がアラバマに來なかつたとしても、モンゴメリーのボイコット運動は起こつたであろうということを、理解させてください。どうか私がここにいるのは、歴史の押し出す力のゆえであり、新聞や見出し記事に自分の名前が出ることもないアラバマの五万の黒人たちのゆえであることを、理解できるように助けてください。ああ神よ、どうか私が今日立っているこの場所にいるのは、他の人々が私を助けてくれているお蔭であり、歴史の諸力が私をここに押し出しているからなのだとすることを、分かせてください。⁽⁴⁰⁾

キングは、一九六三年、『タイム』誌の「マン・オブ・ザ・イヤー」に選ばれ、その表紙を飾つた。また翌年の六四年には、ノーベル平和賞を受賞した。それらに象徴されるように、一九五六年のモンゴメリーの勝利から、一躍有力な黒人指導者の地位へと駆け上つたキングは、たえず人々から注目される存在となつた。しかし、この祈りの言葉が示すように、一方では密かな自惚れと自負心を覚えながらも、他方では、それは自分の実力のなせる業ではなく、あくまでも、ただ神によつて用いられているゆえに過ぎないとの自覚もあつたのである。傲慢と謙遜、おそらく、その両方が繰り返しキングの心を揺さぶり続けたのではなからうか。しかし、どれほど自負心が高まつても、「歴史の押し出す力」によつて導かれてきたことを否定することはできなかったことも確かなようである。そして、その限り、キングも「時

代精神」によつて歴史に出現させられた一個の存在であつたと言えよう。そしてまた、そこにわれわれは、キングが理解した歴史における神の働き、すなわち聖霊の働きを見て取ることができるであろう。

注

- (1) M・L・キング『自由への大いなる歩み』雪山慶正訳、岩波書店、一九五九年、四二―四三頁。訳書には差別語が見られるが、以下の引用では訳書のままとしていることをお断りしておく。なお、語句の統一のため、翻訳をそのまま用いていないところがある(以下同様)。
- (2) ローザ・パークス『ローザ・パークス自伝』高橋朋子訳、サイマル出版会、一九九四年、一二九―一三〇頁。
- (3) 同上書、一三〇頁。
- (4) マーチン・ルーサー・キング『黒人はなぜ待てないか』新装版、中島和子、古川博巳訳、みすず書房、一九九三年、一〇七頁。
- (5) *WEBSTER'S New Collegiate Dictionary* (Springfield, Mass.: G. & C. Merriam Co., 1974), 1362.
- (6) この「時代精神」という言葉は、元々はドイツ哲学の中で用いられてきた概念である。おそらくキングはそれをヘーゲル哲学を学ぶ中で知ったのではないかと思われるが、キングはこの概念をすでに触れたようにドイツ哲学の流れからは離れて、より一般的な意味で用いている。ちなみにその本来の哲学的意味は、『世界大百科事典』によればおおよそ以下の通りである。

一般に、ある時代に支配的な知的、政治的、社会的動向を特徴的に表す全体的な精神的傾向をいう。この言葉は、も

ととも、一八世紀後半から一九世紀にかけて、とくにドイツにおいてつくられたもので、〈民族精神 Volkgeist〉という概念の形成と相関している。ヘルダーは、民族的な精神文化、とくに民俗的、地方的な言語や詩に深い関心を寄せるとともに、人類史を人間精神の完成に向かう普遍的歴史としてとらえる考え方を提示し、〈もろもろの時代の精神〉を示す〈諸民族の精神〉、〈諸民族の天才〉などの概念を用いた。さらに、ヘーゲルは、〈民族精神〉（近代国民国家の形成にともない〈国民精神〉ともなる）を、人類史（世界史）の発展の諸段階における普遍的な〈世界精神 Welgeist〉の顕現と考え、民族精神の歴史的、時代制約的性格を明確にした。こうして、普遍的な人間精神が特殊的、歴史的現実具現するところに、ある時代の精神と文化の特徴を表す時代精神の存在をみる見方が確立される。

このような考え方は、一九世紀を通じてしだいに歴史学や法学、経済学などさまざまな分野で展開された。ディルタイは、時代精神を、知（考え方）、情（価値観）、意（目的）の精神的生の作用連関においてとらえ、価値観を中核に、これら作用連関の表出（歴史と文化）のうちに時代精神を理解する精神科学を提唱して、大きな影響を与えた。こうして、時代精神を、ある時代のある国民が自己を自覚する原理（歴史意識）とみる考え方とともに、ある国民の思想と文化がある時代のもつ条件（精神風土）に制約されるという考え方がひろがり、イギリスやフランスにも受け入れられ、ドイツ的な超越論的精神とはちがった多様な理解が生まれた。そして、歴史における時代区分の問題にも影響を与えるなど、多面的に拡散しながら、今日では一般的な用法に解消している。（荒川幾男）（『世界大百科事典』12、平凡社、一九八八年、三二九頁）

(7) 上掲、『自由への大いなる歩み』、二四六―二四七頁。

(8) 同上書、二四七―二四八頁。

(9) C. Vann Woodward, *The Strange of Jim Crow* (Oxford University Press, 1955). (邦訳は、C・V・ウッドワード『アメリカ人種差別の歴史』新装版、清水博、長田豊臣、有賀貞訳、福村出版、一九九八年)

(10) 同上書、一二頁。

(11) 同上書、一三頁。

(12) 同上。

(13) 同上書、一四頁。

(14) 同上書、二四二頁。「訳者あとがき補足」の中で、訳者の一人である有賀は、著者のウッドワード自身が、その回顧録 *Thinking Back: The Perils of Writing History* (Louisiana University Press, 1986) の中で、本書の初版本に言及し、それが「その後の公民権運動の高まりの中で予想外に広い読者を得て、マーティン・ルーサー・キング牧師より『公民権運動のための歴史のバイブル』として引用されるまでになったことを述べている」と指摘している。

(15) 同上書、一五九—一六〇頁。

(16) 同上書、一六〇頁。

(17) M・L・キング「述」、クレイボーン・カーソン、クリス・シェパード編『私には夢がある——M・L・キング説教・講演集』梶原寿訳、新教出版社、二〇〇三年、六一頁。

(18) 上掲、『自由への大いなる歩み』、二四八頁。なおキングは、こうしたアメリカの人種問題の危機は、アジアやアフリカでも展開されている「自由と人間的権威への要求」の動きと軌を一にするもので、「世界的危機の一部」であると見ていた。そして、アメリカの危機についても、以下のように言及している。「いささか逆説的ない方だが、この危機が発展したのは、ほとんど二世紀の間、不完全にしか実現されなかったアメリカ民主主義の最も荘嚴な原理がようやく完成されはじめて、自由の成長をはばみこれを抑圧しようとする力の野蛮な抵抗にぶつかったときのことだ」(同、二四九頁)。またキングは、歴史的取り組みについてのその後の見通しについては、次のように語っている。「だが、いまでも行動を開始する時機がおそすぎるということは決してない。一切の危機のなかには、危機と同時に機会があるのだ。それは解決をうみだすこともできるし、破壊をもたらすこともできる。現在の人種問題の危機のなかで、アメリカは人種上の正義を獲得することもできるし、社会的な精神錯乱におちいってしまうこともできるのだが、こうした精神錯乱は国家の自殺をもたらすほかはあまるまい」(同、二五五頁)。

(19) 同上書、一一頁。

(20) リリアン・E・スミス『今こそその時——「ブラウン判決」とアメリカ南部白人の心の闇』廣瀬典生訳、彩流社、二〇〇八年、九頁。

(21) 上掲、『自由への大いなる歩み』、七四—七六頁。

(22) 同上書、七三頁。

- (23) 同上。
- (24) 以上、同上書、七四頁。
- (25) マーシャル・フレディ『マーティン・ルーサー・キング』福田敬子訳、岩波書店、二〇〇四年、一三六頁。
- (26) 上掲、『黒人はなぜ待てないか』、一一三頁。
- (27) 同上。
- (28) 同上書、一二四頁。
- (29) 同上。
- (30) 同上書、一一五頁。
- (31) 同上書、一五五―一五六頁。
- (32) 上掲、『アメリカ人種差別の歴史』、一九一一―一九二頁。
- (33) Taylor Branch, *Parting the Waters: America in the King Years 1954-63* (Simon and Schuster, 1988), 882.
- (34) 以上、上掲『私には夢がある』、八九頁。
- (35) Branch, *Parting the Waters*, 883.
- (36) Ibid.
- (37) キングの伝記を書いたウィリアム・R・ミラーは、ワシントン大行進を、少し別の視点（非暴力）から振り返り、次のように語っている。「どう見ても、それはマーチン・ルーサー・キングの日だった。何千万というアメリカ人、それを上回るヨーロッパ人がテレビの画面に見入り、ラジオに耳を傾けた。集会自体もアメリカで催された最大のものであった。暑さや疲れで倒れた人は千七百人を越えたが、暴力で傷ついた者は一人もいなかった。その意味で、それはキング・デーであった」（高橋正訳『マーチン・ルーサー・キングの生涯』角川書店、一九七一年、二五八頁）。
- (38) Coretta Scott King, *My Life with Martin Luther King, Jr* (Holt, Rinehart and Winston, 1969), 239.
- (39) Ibid., 240. 注37で触れたミラーも、「彼『キング』は調子の高まり、感情の高まりとともにすべての耳、すべての心を夢中にさせた。聴衆は単に耳を傾けるだけでなく、没入し、演説の終わりをきく前から嵐のような歓声がうずを巻いて高まっていた」（上掲、『マーチン・ルーサー・キングの生涯』、二五八頁）。

(40)

マーティン・ルーサー・キング著、クレイボーン・カーソン編『マーティン・ルーサー・キング自伝』梶原寿訳、日本基督教団出版局、二〇〇一年、一三〇―一三一頁。